

## 資料室だより 120

第 29 期本科生の寄贈により下記の楽譜を購入しました。

Recent Researches in the Music of the Renaissance 22: Ed by D.A.Sutherland

### **The Lyons Contrapunctus (1528), Part II**

Part I はすでに所蔵しておりましたのでこれで全巻完結し、皆様にご紹介することができます。これはミサ固有文に相当する聖歌を多声楽曲にした最初の楽譜集、そしてフランスで印刷された 2 番目に古い印刷楽譜の校訂です(一番古いのはアテニヤンのシャンソニエ)。演奏、学問研究、解釈の両面から使用されることを意図しています。

フランソワ 1 世の治世でフランスのポリフォニーは非常に高度な発達を遂げます。この曲集も音楽史的に極めて高い価値があるもので、モーツアルトの師としても有名なパードレ・マルティーニ師もこれについて言及しております。I~II 巻を通して教会暦をカバーする単旋律聖歌のミサ曲 (Introitus, Graduale, Alleluia, Offertorium, Commnio) とそのコントラプンクトゥス—すなわち対位法楽曲で構成されています。II の最後に若干のモテット *Salve virgo singularis, Media vita, Ave Maria* が所収されています。興味深いことに 1 巻の最初と 2 巻の最後に *Asperges*—灌水式の曲が入っています。冒頭のもは年間に、最後のものは復活節にもちいられます。

作曲者については不明です。複数の作曲家が選ばれていることは確かですが、名を同定することが未だできません。編纂者は、その時代の最高ランクの作曲者の作品を、ミツバチが良い香りを求めて忙しくあちこち飛ぶように集めたと述べています。

私たちはミサ曲というとミサ通常文に作曲された 5 楽章のセットを想定します。ミサ曲は無数にありますが、中世にはオルガヌムの様式で輝かしいモニュメンタルな固有唱作品がありますが、テキストが固定された通常唱と違い、固有唱は演奏される機会が年に一度、とか極端に少ないため、ルネサンス以降はバードやイザークなどの特殊例を除いて目立った作品がなく、言及されることもめったにありません。

典礼文化における固有唱の歌唱実践の観点からもこの叢書は編纂されています。教会音楽史の勉強の一環としてどうぞご利用ください。

(杉本ゆり 記)